

氏名(本籍)	いしもととしや 石本敏也(新潟県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第3022号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	農山村落における民俗変遷の研究 —阿賀野川流域の藁製祭具—
主査	筑波大学教授 博士(文学) 真野俊和
副査	筑波大学教授 博士(文学) 古家信平
副査	筑波大学教授 博士(文学) 根本誠二
副査	筑波大学助教授 博士(文学) 前川啓治

論文の内容の要旨

本論文は、農業の機械化などの影響で現在消滅しつつある二種の藁製祭具、即ち百万遍行事と藁人形祭祀を対象とし、その多様な変遷実態の要因理解を、モノ(具体物)への動的な視点から試みたものである。全体は大きく2部で構成され、序論、結論、補論を合わせた、全14章からなる。

序論「百万遍行事と藁人形祭祀の変遷」では、研究史および対象を動的に把握する分析手法が検討された。著者はここで、モノの素材としての物質、そこに人間が関与する行為、その結果として完成する造形の、3つの頃から対象=モノを捉える見方を提示し、民俗事象の変遷要因を、経済的社会的要因からのみ捉えるのではなく、担い手が行う行事内における先の三者関係の内側から捉え、その内実を明らかにすることができるかと主張した。

本論第1部「百万遍行事変遷の要因」は、阿賀川流域に位置する8集落での百万遍行事の変遷を事例とするものである。百万遍とは村人たちが1年に一度集まって長大な数珠をまわし、死者の供養や様々な災厄を防ごうとする行事のことである。

第1章「百万遍行事変遷の実態」では調査に基づく実態把握を通して、当該行事には藁の不足という現実に対して、既成の大数珠を購入して行事を継続する方向と、藁縄からナイロンに素材を変えて行事を継続するという、二通りの変遷実態が見られることがまず明らかにされた。

第2章「物質、行為、造形による三者関係の構築」では、百万遍行事の執行・終了の方法が2つの類型に大別されることが示された。即ち、一定回数の念仏を唱えることで行事の終了にいたるという風習の地区と、藁縄を多数の細片に切断して各自が持ち帰り、各家庭の魔よけとして飾るという風習をもつ地区とである。そして検討の結果、この2類型が第1章で見いだされた2つの類型に対応することが明らかにされた。著者はこの対応関係を考察することによって、これらの変遷形態が、物質、行為、造形の間に内在する論理的な関係の結果に他ならないと主張された。

第2章ではさらに、この変遷法則にあてはまらない例外的な事例についても考察が加えられた。その結果、大数珠そのものに付着するとされる霊力に対しても、一定の秩序を与えることによってその安定化をはかるという型の民俗心意と、大数珠を切断することによって霊力の分散をはかるという民俗心意の2つのタイプの存在が認められ、それが先の2様の変遷の底流をなしていると主張された。

第3章「百万遍行事変遷の要因」では、第1部のまとめとして、より理論的な整理が試みられた。従来の信仰

民具研究が物質重視に偏っていたことを批判し、行為も含めた物質と造形の三者関係の検討によって変遷要因の対応関係を指摘しえたこと、さらにその例外事例を通して、変遷後の造形に始まる新たな要因が示され、変遷要因の二重構造が指摘された。

第2部「ショウキサマ祭祀継続の要因」では、第1部で扱った地域とほぼ重なる阿賀野川流域の6集落における、ショウキサマと呼ばれる藁人形祭祀を素材とする考察が試みられた。

第1章「ショウキサマ祭祀の実態」では、第1部と同じく調査に基づく実態把握が行われ、当該地域の村々において行われる藁人形祭祀の現状が示された。それによれば、ショウキサマとは毎年2月頃、この地方の各集落において製作され、村はずれの立木等に飾られる藁製の大人形のことで、主に村に進入してこようとする魔物から村を守ると信じられているという。

第2章「造形と行為の関係性」では、藁束が減少する中行われる、藁人形祭祀継続の要因分析を行った。本章第1節「『人形道祖神』論の再検討」において著者は、ショウキサマを製作するという行為よりも、祭以後にその人形がどのように処理されるのかという点に着目し、そこから藁人形祭祀の意味を探ろうとした。その結果、ショウキサマの処理においては必ずその造形を崩していくという行為が伴うこと、一方で、造形としてのショウキサマが持つ霊力の背景に巨大な災厄が存在することの2点を捉えた。そしてこの行為と認識の間には不可分の関係があること、即ちショウキサマとは災厄を霊力の背景に持つ限り、処理においてその造形は必ず崩されねばならず、そこで初めて行事は完結するものであると理解した。その結果として、ショウキサマは毎年常に製作され続けねばならないという論理を導き出した。同時にそれは従来の「人形道祖神」論が主張してきた、藁人形から石像の道祖神へという仮説には論理的な根拠に欠けるという主張がなされた。さらに第2節「造形と発話行為との関係性」では、この藁人形にとりつけられる性器に関する説話を、造形以後に付加される発話行為として分析を加えた。その結果、その説話は従来の論が否定してきた性器そのものに対する信仰ののちのちのものという見解に到達した。

第3章「ショウキサマ祭祀継続の要因」では、第2部のまとめとして、造形が発話という行為を経て一つの説話を形成し、その説話が再び製作という行為に伴って新たな造形を創造するという、行為と造形の連続的な関係を指摘した。即ち、従来モノを扱う際に無自覚であった発話行為を一行為として重んずることによって、造形を媒介とした製作行為に再び帰っていくという連鎖構造の存在が明らかにされた。

結論「関係性に基づく変遷要因」では、本論文の総括として民俗変遷要因の指摘とその可能性を提示した。まず変遷要因として、従来の信仰民具研究において軽視されがちであった、農業の機械化といったモノを取り巻く状況の重みが提示され、しかしその一方で、要因にそうした状況だけでなく担い手の経験蓄積が持つ影響力と、そうして完成されたモノに、担い手が不断に関与し続け、新たな意味づけを与えていることが指摘された。変遷要因とはこうした複数の関係性により存在し、その関係性の丹念な分析から抽出されるものである。また可能性としては、このようにモノそのものを丹念に読み取る方向へ視野を広げることによってモノの類型化・形式化に陥る陥穽を避け、多様に存在するモノを多様ななりに位置づけることと著者は主張する。即ち民俗変遷の要因として、大規模な経済的影響が、民俗事業を一律に軒並み変えていくという従来の説明だけでなく、また地域差や集落差にその要因を集約させる説明でもない、モノと担い手との動的な関係のなかに変遷の要因を探っていくという方法の可能性があらためて述べられた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は福島県から新潟県におよぶ阿賀野川流域の村々で行われる藁製祭具を指標とする民俗変遷のありようを、従来とは異なる視点からあとづけようとした意欲作である。本論文の評価としては次の3点に要約されよう。

第1は、当該流域において実施されている2種の民俗行事の実態を、長期のフィールド・ワークによって詳細

に明らかにしえた点である。この地域におけるこれらの行事の存在はすでにある程度知られていたことではあるが、現行行事の実態を、変遷過程を含めて本論文のレベルで詳述した仕事は本研究がはじめてであるといえる。

第2は、ある民俗行事が集落ごとに異なる過程をたどって分化していく要因を、当該地域における行事の相互比較によって明らかにしえた点である。従来の研究がともすれば共通性の抽出を急ぐ余り、変遷の多様性を看過しがちであった傾向に対して、本論文の主張は大きな成果となった。

第3は、民具研究という領域において、具体物に働きかける人間の側の様々な行為―祭祀の方法、廃棄の過程、説話の発生など―と具体物とを関連させながら総合的に考察を加えることによって、新しい可能性が生まれてくることを示しえた点である。従来の研究が素材や製作・使用方法など、具体物そのものの周辺に限定されがちであったのに対し、本研究は新たな地平を切り開くものとなることが期待される。

一方で本論文の課題を2点ほど指摘しておきたい。第1は、研究史への目配りという問題である。もちろん民具研究史や民俗変遷論に関する研究史についての言及はなされていたものの、さらに著者自身の方法論や理論が研究史のなかでどのような位置に存在するのかということについて、あと一步の掘り下げが望まれる。第2は、人間という存在を著者の論理構成のなかでどのように評価するかという問題についてである。本研究が民具というものを素材としながらも、それがあくまで信仰のための道具である以上、人間という要素への目配りは不可欠であろうが、そうした点についてさらに深める余地が存在する。今後はこうした点についても視野をひろげた、よりスケールの大きい理論の構築が望まれるであろう。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。